

要旨

17・18世紀フランス・モードにおけるアンディエンヌの受容

権 裕美

本論文は、インドからもたらされた多様な色彩と図柄の綿布、すなわちアンディエンヌのフランス・モードにおける受容を分析し、アンディエンヌが近世フランスの新しい服飾様式の創造に、どのように関わったのかを明らかにする。アンディエンヌが輸入され流行品となった1670年代から、1686年以降1759年まで継続された禁止令にもかかわらず人々をひきつけ、あらゆる生活空間に活用されるようになった18世紀末までを対象とする。1720年から1737年までにフランス国内外で生産されたあらゆる種類の織物が収録されているリシュリュール・コレクションおよびルイ15世の公妾ポンパドゥール夫人（1721-64年）の死後作成された財産目録を通してアンディエンヌ、および同種の綿布を指す類語について、その実態を明らかにし、次いでアンディエンヌの染色技法の発展による多様な色彩や文様の特徴を分析する。そしてトワル・ド・ジュイ博物館およびミュルーズ染織博物館に所蔵されているアンディエンヌ製の服飾遺品の分析、および1778～87年に刊行されたモード誌『ギャルリー・デ・モード』の版画分析によってアンディエンヌのモードにおける受容を考察する。

第1章では、アンディエンヌということばの意味の検証から始め、リシュリュール・コレクションに収められた布見本集およびポンパドゥール夫人の財産目録を通して、アンディエンヌを示す多様なことばを検証する。アンディエンヌは、インドで生産された、多様な色彩や図柄が手描き染めされた、もしくは捺染された綿の布地を意味する。そして、この布地で作られた男性用および女性用の部屋着をも指すことばである。さらに、このようなインド産の捺染綿布を模倣してヨーロッパで生産された布地もまたアンディエンヌと呼ばれた。アンディエンヌということばが広い意味で使われたことは、その流行の大きさを物語っている。リシュリュールの布見本集とポンパドゥール夫人の財産目録によれば、フランスで生産されたアンディエンヌは、トルコ、シリアなどを通して輸入されたインド綿布をもってマルセイユで捺染されたが、アゼミ、シャフラカニ・ダレブなど取引先によって多様な名称が存在していた。また、フランス国内で再生産されたアンディエンヌ模造品は、アフリカへ貿易品として再輸出されていたから、ギネー、アンディエンヌ・サン・ジョゼフなど、取引先のアフリカの多様な地名が付けられた。国内産の中には、シャモワズ、シノワズなど異国風の名を付けたもの、トワル・ドラングジュなど生産地を冠したものもある。綿布の名称のこのような多様性は、アンディエンヌが国際交易、模造品生産および消費の対象として大いに機能していたことを意味している。しかも、これらの多くの種類の綿布が、衣類だけでなく、調度品としても幅広く用いられた。このことは綿布がいかに流行し、人々がこれを好んだかを示している。

第2章では、1686年から1759年までの間に発布されたアンディエンヌ禁止令と18世紀の二人の経済学者フォルボネーとモルレによるアンディエンヌ禁止令をめぐる論争について分析する。彼らによれば、アンディエンヌは安価であり、美しく、かつ保温性や洗濯の可能性などの合理性の面で好まれており、ゆえに彼らは禁止令の経済性を不合理として訴げ、生産を許容することを主張している。禁止令が解除された1759年以降、フランスではジュイ工場を初めとしアンディエンヌ生産のマニュファクチュアが設立され、その染色技法や図案デザインは展開を遂げた。フランスのマニュファクチュアでは最初はインドの木版技法が模倣されたが、1770年には銅板染色が始まり、1797年には銅板ローラ染色技法が用いられるようになり、インドの染色技法を超えることになった。木版ではモチーフものを中心とした写実的または図案化された模様が主流であったが、銅板染色技法ができてからは、神話、オペラ及び小説、田園風景など、あらゆるテーマが布上に現れるようになった。このことは、銅板染色技法が大きな布地を生産できるようになったことを示しており、これらの布は室内装飾として多方面に現れた。

第3章では、パリ近郊のトワル・ド・ジュイ博物館およびアルザス地方のミュルーズ染織博物館に保存されている1770～90年代のアンディエンヌ製の服飾遺品の分析、および1778～87年刊行のモード誌『ギャルリー・デ・モード』誌の分析を通して、18世紀後半の人々の生活においてアンディエンヌがどのように受容されたのかを明らかにする。アンディエンヌを素材とした衣服は、部屋着、ローブ・ア・ラ・ポロネーズ、ローブ・ア・ラングレーズ、カザカンとカラコ、ジュポンなど、寛ぎ着という共通の性格を持っている。ヴァトー、モローなどの絵画作品によれば、ローブ・ア・ラ・ポロネーズ、ローブ・ア・ラングレーズ、カザカンとカラコ、ジュポンは、散歩と休息、庭園での集いの際に着用された衣服である。18世紀の貴族たちは、このような装いで、豪華で厳格な宮廷生活から離れ、自然の中で散歩や憩いの時間を楽しみ、気晴らしをしたのである。すなわちアンディエンヌ製衣服の流行の背景には、田園趣味というイギリス趣味に影響された新しい嗜好を取り入れた生活の変化があり、それを象徴的に示すのがアンディエンヌという素材なのである。

アンディエンヌは綿布という素材の持つ実用性と機能性により、簡素化された衣装の素材として相応しく、このことは18世紀フランスの新しいモード創造にアンディエンヌが貢献したことを示している。